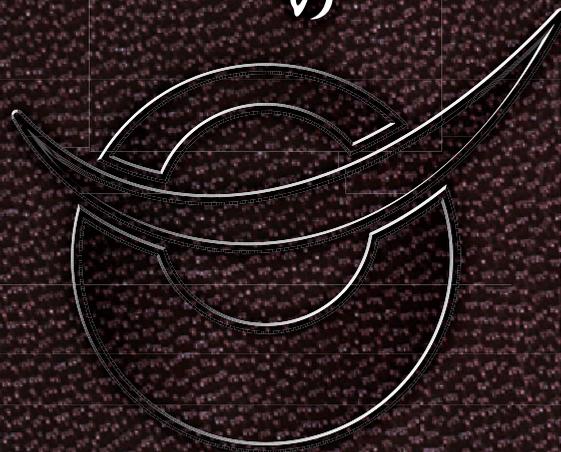


伊達氏ゆかりの
歴史を訪ねて



あふれる歴史ロマン

伊達氏発祥の地

福島県伊達市

はじめに

平安時代の終わりごろ、東北地方はほぼ平泉の藤原秀衡が実効支配していた。文治5年（1189）、源頼朝が平泉藤原氏を倒すと、頼朝配下の関東武士たちが次々と東北の各地へ地頭として送り込まれてきた。伊達郡に誕生した伊達氏もその一人であった。およそ800年前のことである。彼らの幾人かは後に実力で守護代や守護職を勝ち取り戦国大名となった。そして天正18年（1590）、豊臣秀吉によって全国制覇がなされた後、秀吉にはむかった大名たちは取り潰され、多くの配置換えが行われた。奥州の覇者伊達政宗も秀吉には抵抗できず、天正19年、伊達郡・信夫郡などの故地を召し上げられ宮城県地方へ移された。

このパンフレットは伊達氏が伊達郡と関わった約400年間の主な足跡をたどったものである。



伊達氏略系

1 朝宗 - 2 宗村 - 3 義広 - 4 政依 - 5 宗綱 - 6 基宗 - 7 行朝 - 8 宗遠 - 9 政宗 - 10 氏宗
- 11 持宗 - 12 成宗 - 13 尚宗 - 14 植宗 - 15 晴宗 - 16 輝宗 - 17 政宗 ……

あつかしやま 厚樫山の合戦、伊達氏誕生

厚樫山 二重堀跡

伊達郡国見町

源頼朝は弟の義経をかくまう平泉の藤原秀衡・泰衡父子が救せなかった。とりわけ藤原氏の権力と財力が救せなかった。当時、白河以北は平泉の勢力下にあり、頼朝は藤原氏追討のため全国の御家人たちに動員令を出した。秀衡急死の後、泰衡は義経の首を頼朝に差し出したが既に遅かった。文治5年（1189）7月19日、頼朝は自ら東山道軍を率いて東山道・東海道・北陸道の三方から28万余もの大軍を発した。泰衡は仙台付近に本陣を構え、部下の佐藤氏（飯坂大鳥城主）の地盤である信夫郡・伊達郡に前線基地を設けた。佐藤氏は当時信夫庄司と呼ばれ、信夫庄という荘園の管理者で、秀衡の娘を妻としていた実力者であった。平泉軍は厚樫山から阿武隈川までおよそ3kmにわたって「二重堀」を築いて、待ち構えた。二重堀の幅は約15m、堀間も約10m。大将は義兄の西木戸太郎くにひら国衡で、その勢2万余。二重堀以北以東の山中は兵士で溢れたという。

8月7日、大軍を率いた源頼朝軍は伊達郡に入り、国見駅（藤田観月台付近）に着いた。頼朝軍は国衡の軍の数倍の人数であったと見られる。頼朝軍は夜中に鋤鍬などで、堀を埋めて前進しようとしたことなどが、「吾妻鏡」に記されている。8日、二重堀を挟んで少しの小競合いと両軍睨み合いが続いた。一方、頼朝の配下にいた中村常陸入道ひたちちゆうどうねんさい念西たちは百姓の姿に変装して伊達郡沢原に進出、石名坂に陣取っていた信夫庄司佐

藤一族を討ち取るなどの戦功をあげた。佐藤一族の首は厚樫山の経が岡さらに晒されたという。9日、頼朝軍の一隊が国衡軍の背後に回り、関とぎの声をあげた。驚いた国衡軍はほとんど戦うことなく退散逃亡し、その途中で国衡は殺害されている。それほどの抵抗なく頼朝軍は平泉に達し、泰衡も殺害されている。いま厚樫山の二重堀は麓の斜面から阿武隈川の近くまで部分的に残っており、往時の合戦の姿しが偲ばれる。国指定史跡。



二重堀

たかこがおか 高子岡城跡 ⑤

ほばら
保原地区

文治5年「厚樫山の合戦」で大活躍した中村常陸入道念西（下野国芳賀郡中村および常陸国伊佐の領主）は頼朝から恩賞として伊達郡を拝領し、後に伊達郡高子岡に居城したと伝えられる。そして姓を伊達ちんごに改め、鎮護の神と



高子岡城跡

して亀岡八幡宮を山上に祭ったという。現在も高子岡に八幡宮がひっそり建っている。

栗野大館跡 31

やながわ
梁川地区

伊達氏歴代の中で一人だけ栗野氏を名乗った人物がいる。第三代とされる義広である。諸種の伊達系譜や伊達系図に「栗野義広」と見える。『伊達正統世次考』は、梁川八幡神主菅野神尾の旧記によって、伊達氏は高子岡城から栗野大館へ移り館主を伊達氏第三代の義広としたことが記されている。延宝3年（1675）の『伊達信夫廻見覚』は、栗野大館は梁川から二キロメートルの場所に約三百m四方に土塁をめぐらせ、伊達家の先祖が居館したとしている。栗野大館跡は栗野地藏堂の南側に位置し、土塁とみられる部分がわずかに残る。江戸時代初期までは栗野村分であったが、以後は梁川村に属した。



栗野大館跡の土塁

たという。三箇山は大進局の弟常陸三郎資綱が地頭をしていた土地であった。

『伊達正統世次考』には、大進局が伊達郡山戸田に隠居したことが記されている。伊達氏は承元2年（1208）に密かに貞暁を次の将軍に就けようとして失敗。貞暁も高野山の行勝上人のもとへ逃れた。山戸田は大進局の弟為家の分流である石田氏や山戸田氏が住んでいた地域で、大進局が一族を頼って逃れてきたとも考えられる。現在、石田地区の菅野氏はこの石田氏の子孫であるとされている。

不思議にも10年後の建保6年（1218年）、北条政子は貞暁に次の将軍になってくれるよう懇願したと伝えられる。しかし貞暁は自ら一眼を潰して、辞退したという。大進局は貞暁が死去した寛喜3年（1231）ころは大阪に住んでいた。



コンクリート樹の左が井戸

たいしんのつぼね 大進局ゆかりの井戸 37

りょうぜん
壺山地区

壺山町山戸田地区に大局（大進局）が使用したと伝えられる井戸がある。大進局は伊達氏初代の娘で、源頼朝の側室となり男子（貞暁）を産んだ。しかし正妻北条政子の妬むところとなり、大進局は鎌倉を追い出されて京へ、貞暁は京都仁和寺へ移された。大進局には源頼朝から生活の糧として伊勢国三箇山が与えられ

げんなえうち 元苗内の薬師如来像 45

つきだて
月館地区

平泉藤原忠衡の妻小笹が亡夫の冥福を祈るために造立したと伝えられる。承元4年（1210）京都仁和寺の僧観月（藤原忠衡の子）を招いて開山。小笹は佐藤民部の妻または娘との説もある。観月は同時代の僧仁和寺貞暁と接点はないのだろうか。市指定文化財。

伊達五山 29

満勝寺跡、光明寺、観音寺、光福寺、東昌寺 梁川地区、伊達郡桑折町・国見町

伊達氏第4代の政依は自身のために「東昌寺」を、曾祖父念西（伊達氏初代）のために「満勝寺」を、念西夫人のために「光明寺」を、父義広のために「観音寺」を、義広夫人のために「光福寺」を建立した。いずれも臨済宗の寺院で、伊達五山と呼ばれたらしい。祖父とその夫人の寺は建立しなかったことは不思議である。

満勝寺跡は桑折町万正寺地区にある。土塁に囲まれた方形の画で、やや北寄りの箇所^{まさより}に土饅頭があり、その前に石塔が建っている。試掘調査の結果、土塁は外側に堀を伴い、13世紀前半と見られる瓦片が出土



伊達氏初代念西墓

している。鎌倉の永福寺と同文様であったという。

念西夫人の墓は国見町光明寺地区にある福聚寺境内にある。福聚寺はもと光明寺の塔中の一つで、念西夫人の墓を守るために残ったと見られる。本来の光明寺は福聚寺のある沢一帯の広い地域であったと思われる。土塁などはなかった。

伊達五山の観音寺の位置については、桑折町万正寺地区の坂町の観音寺説が有力であるが、そこからやや

南にある中屋敷観音説、国見町徳江の観音寺説もあり、注目される。

光福寺については桑折町南部の火葬場

の近くに「光福寺」の字名が残っているので、ここに間違いのないであろう。現在は水田となっている。

宮城県図書館蔵の梁川絵図および桑折絵図に「東昌寺」の記述がある。桑折町では万正寺地区の古釈迦堂が東昌寺に推定される。梁川では梁川高校のグラウンド付近が推定される。延宝期の梁川絵図によれば、中世梁川城の東には東昌寺・覚範寺・輪王寺などの伊達家由緒の寺が連なっていた。東昌寺は京都東福寺の仏智禅師を招いて開山した。南北朝期の末ころは陸奥安国寺利生塔を兼ね、15世紀ころは東昌寺に二百人の僧がいた^{がうん}（臥雲日件録）大寺院だったが16世紀には桑折へ移っている。梁川高校の南崖、広瀬川縁に岩地蔵と呼ばれている磨崖仏群がある。方形の窪みの中に五輪塔が確認できるが、多くは風化が進んでおり、地蔵と確認できる姿は見つからない。五輪塔の形から推測して鎌倉～室町期のものであろうか。昔は広瀬川がもっと南を流れていたと考えられ、岩地蔵の下は東昌寺へ登る参道であったと見られる。近くの古町観音堂は利生寺や利生殿の別号もあり、東昌寺に関連するものと見られる。



念西夫人の墓



岩地蔵

かま 八郎窯跡 19

梁川地区

八郎窯跡は13世紀の窯跡と見られ、5基の窯跡が確認されている。このうち2基が発掘調査され、片口鉢・甕などの製品が出土している。窯の時期が伊達氏の伊達郡入部後の時期に重なるので、伊達氏が陶工を連れてきた可能性が考えられている。



出土した甕片



発掘調査時の窯跡（現在は埋め戻されている）

べにや 紅屋峠の供養碑 14

保原地区

かすかに正和2年（1313）癸丑9月17日の銘が読み取れる。上部に梵字があったと見られる。この種の碑は一般に板碑と呼ばれ、供養碑と考えられている。最近、近在の平地区でも類似の板碑が二基見つかった。

いたび 光台寺の板碑 4

伊達地区

6基の板碑が光台寺境内に保存されているが、5基は字平の馬頭観音堂前の畑から出土したという。そのうち「正応2年（1289）」と刻まれているものが3基あり、3月21日・5月7日・7月11日の日付がある。造立の理由をしるした銘文は見えない。板碑は肉親の死にあたって、極楽浄土を願って供養のために造立するもので、ある程度の有力者が造立したと考えられる。近くに館の内の地名があり、ここに居館した一族のものであろうか。伊達氏の3代か4代の時期である。



板碑群

にっそん 蓮昌寺の玉野大夫日尊 32

霊山地区

蓮昌寺の開山である日尊は玉野で生まれ、玉野大夫と称して高貴な方の落胤であったと伝えられている。少年のころ天台宗の寺院（霊山寺か）で修行し、のち日蓮の弟子日目の弟子になり全国に日蓮宗の三十六寺を開いたという。立子山の一円寺がその一寺で、高湯

温泉で出会った地頭松尾信高の招請により開山した。

奥州南朝の雄伊達行朝

りょうぜん
霊山寺跡と霊山城跡 33 35 40 霊山地区

美しい紅葉で知られる霊山。『霊山寺縁起』によれば、山上にはかつて慈覚大師が開山し3,600坊を擁していた大伽藍「^{がらん}霊山寺」があった。霊山寺は、南奥州の天台密教の中心であったと考えられる。

元弘3年(1333)暮れ、建武新政権下、新しい奥州政府開府のため^{ごだいご}後醍醐天皇の^{のりよし}皇子義良親王が陸奥国司北畠



紅葉の国司沢

^{あきいえ}顕家とともに多賀の国府へ下った。このとき伊達行朝は結城宗広入道とともに奥州府の式評定衆に名を連ねていた。建武2年(1335)12月、京都を制圧した足利尊氏軍を討つため、顕家らは奥州軍を率いて上洛、尊氏軍を西走させて凱旋帰国した。しかし多賀城が危うくなると、建武4年1月8日義良親王(陸奥国大守)・北畠顕家(鎮守府將軍)らは、霊山寺の勢力と南朝の雄伊達行朝・結城宗広入道を頼って多賀城から伊達郡霊山城に移った。(1月25日付けで北畠顕家は霊山に着いたことを天皇に報告している)当時、霊山の山を境に西側

の伊達郡が伊達氏の領、東側の宇多郡が白河結城氏の領となっていた。

建武3年の石田孫一着到状によれば、建武2年12月から石田孫一は霊山館で警護にあたっているから、多賀城着任時まもなくから霊山寺は南朝奥州政府の重要な基地として整備が開始されていた。有力な大将(広橋修理経広か)が在城していたと見ることができる。

顕家らは再び京都の北朝を追い払うため、建武4年8月11日霊山城を離れ、大軍を率いて西上した。そして翌年5月石津(堺市)あるいは阿倍野(大阪市)で戦死したという。21歳であった。

同年9月顕家の跡を継いだ弟北畠^{あきのぶ}顕信ら奥羽南朝方の一行は北畠氏の故郷伊勢から船で奥州へ向かった。しかし嵐に遭い、伊達行朝・北畠^{ちかふさ}親房らは常陸に流れ着き、北畠顕信・結城宗広入道らは伊勢に吹き戻されたという。北畠親房らは小田城や伊佐城を中心に勢力を挽回しようとした。その後、延元4年(1339)後醍醐天皇から譲位された義良親王が即位し、後村上天皇となった。興国元年(1340)



石田大館跡



冬の霊山 全景

6月顕信らと合流した伊達行朝らは奥州へ向かった。

合戦は全国的なものだったが、伊達郡内では霊山城や藤田城など各地で合戦が行われた。南朝と北朝で活躍した武将たちの軍忠状や着到状が残されている。霊山城の落城は貞和3年（1347）8月ころで、霊山寺の建物群は全焼したといわれる。林の中に当時の大伽藍を物語る多くの礎石が残されている。いま霊山神社に伝わる青磁の花盆と皿は二つ岩付近で発見されたもので、中国景德鎮窯の優品で輸入されたもの。義良親王在城のころ使用された可能性がある。南北朝の合戦は最終的に北朝方の勝利に終わった。国指定史跡名勝。

らんじょう まい 濫觴の舞 34 35 39

霊山地区

濫觴の舞は幼い義良親王を慰めるため家臣たちが舞ったのが始まりという。また濫觴の舞は北畠顕家らが武運長久を山上の山王社（大宮）に祈願して奉舞したのが起源とも伝えられる。

霊山城廃城後、村人たちは北畠氏や義良親王を偲び、山下の大石地区に移った山王社（日枝神社）に舞を奉納してきたと考えられる。このことは江戸時代の日枝神社由緒等で確認できる。石田地区鈴嶽神社等に古式ゆかしく「濫觴の舞」が継承されている。明治14年大石地区に北畠顕家らを祭神とする霊山神社が創建され、明治18年には別格官幣社となった。その後、霊山神社に濫觴武楽隊が組織され「濫觴の舞」が奉納されるようになったという。ともに市指定無形民俗文化財。

昌源寺 21

梁川地区

北畠顕家の娘が、父の供養のために舟生の小館に草庵を結んだと伝えられる。慶長3年（1598）地元の有力者であった秋葉土佐守が現在地へ庵を移し、昌源寺として開山した。

伊達孫三郎入道道西 13

梁川・保原地区

南北朝時代の元弘3年（1333）伊達孫三郎入道道西の言上状などに船生郷・西大枝・東大枝山田村・小塚郷などの地名が見える。このころ道西はたじま但馬国おさ小佐郷（兵庫県）の地頭となっており、伊達郡に住んでいなかった。道西宛の伊達行朝書状にも舟生郷などが見える。このようにこの時期の伊達一族は伊達郡内に所領を持ちながらも他国にも新所領を得て移住していくケースが多かった。

館ノ山城跡 44

月舘地区

耕雲寺の北の山が館跡である。本丸・二の丸・三の丸・空堀・土塁などが残っている。北畠顕家の臣手渡八郎義為が城主と伝えられる。八郎は顕家に従い、足利尊氏追討軍に参加したという。

伊達家中興の祖、9代伊達政宗

長倉館跡 2

伊達地区

長倉館は長倉要害ともいう。伊達小学校の敷地と東側の一帯が長倉館跡と見られる。明治時代の絵図に堀跡・土塁跡などが見て取れる。現在、館主神社がある

土手が当時の土塁であるという。応永9年（1402）長倉^{くぼう}氏が関東公方に反抗し、9代伊達政宗とともにここに一時たてこもった。のち彼らは桑折赤館に移り反抗したが及ばず、政宗は会津方面へ逃れたという。関東公方が政宗に領地返上を迫ったとき、政宗は北条荘を進呈しようとして断られたというから、このころ北条



館主稲荷神社

荘（山形県南陽市域）は伊達氏の領地であったことが知れる。この後、北条荘は懸田^{かけだ}氏の所領となる。

東光寺の9代伊達政宗墓¹² 保原地区

伊達氏9代政宗は、領地を刈田郡・北条荘方面へ広げたことで知られる。彼の墓は宮城県七ヶ宿町湯原の東光寺と山形県高島町・保原町柱田の東光寺に祀られ、寺号「儀山東光寺殿」と書かれた位牌がある。供養石塔の家紋は丸に横三つ引き両になっているが、伊達家の紋は丸に縦三つ引き両である。



9代政宗墓

輪王寺跡²⁶

梁川地区

輪王寺跡は土塁と堀に囲まれた方形の城郭寺院跡で、合戦時には館として機能した。いま北側の土塁と堀が少し残っているが、境内部分はすっかり住宅地となっている。発掘調査の結果、掘立柱の建物跡等が検出されている。梁川城に在城して



北側に残る土塁

ていた11代伊達持宗が祖母（蘭庭明玉禅尼）のために嘉吉元年（1441）に建立した曹洞宗の寺で開山は太菴^{たいあん}梵守。太菴梵守は常栄寺の開山にもなっている）禅尼は岩清水八幡宮の別当善法寺通清の娘で、姉妹は將軍足利義詮および後光厳院の室となっているため輪王寺は格式の高い寺であった。禅尼の夫である9代伊達政宗は、度々上洛し將軍とも親交があり、歌人としても高名であった。

常栄寺跡²⁸

梁川地区

興国寺の寺伝によれば、常栄寺は梁川城東にあり伊達家の宿老牧野紀伊守の菩提寺であったという。また『輪王寺系譜』によれば、太菴梵守が輪王寺とともに常栄寺を開山したと伝えられ、太菴梵守は当時越後の耕雲寺（曹洞宗）住職にもあった。常栄寺の跡は現在の梁川中学校の地と推定されており、発掘調査の結果、方形の堀に囲まれた寺院跡と判明。当時の陶磁器片も出土している。牧野氏は元龜の変で失脚し、相馬へ逃

れたと伝えられる。伊達氏が梁川を去った後の空き寺に、梁川城代須田家の菩提寺である興国寺（曹洞宗）が入ったという。須田氏は上杉家臣で、慶長3年に越後から梁川城代になった。同じ宗派であり、興国寺は抵抗なく常栄寺の跡に入ったと考えられる。のち興国寺は大町の現在地へ移転した。

大枝城跡 20

梁川地区

阿武隈川に臨む小丘陵の突端部を利用した城である。大條氏は9代伊達政宗の弟孫三郎宗行が分家してここに居城した。応永年間に築城したと伝えられ、綴そが森「袖が崎城」とも呼ばれる。天正年間に大條氏7代宗直のときこの城を去った。慶長5年（1600）、伊達政宗は一時この城に陣を置いて梁川城を攻めている。大枝城の西方500mに方形の住吉館があるが、ここには大條氏ゆかりの城郭寺院があったと見られる。



大枝城跡

伊達持宗・伊達成宗の上洛

応永20年（1413）4月、11代伊達松犬丸（持宗）は室町幕府と関東公方の対立に伊達氏が巻き込まれ、懸田定勝とともに大仏城（福島城）にたてこもった。持宗とその子成宗の居城は主として梁川城であり、彼らは幕府や公家たちに莫大な貢物をしている。特に文明15年（1483）の成宗の上洛は有名で、大量の砂金・百頭

近くの馬・埋もれ木灰・信夫文字摺絹などを献上して都の人々を驚かせた。埋もれ木灰は赤色の灰で、黒色の埋もれ木を燃やすと出来る。これは公家たちの世界で流行っていた香の香炉の灰として貴重な代物であった。名取川のものが特に有名だったが、当時は阿武隈川の埋もれ木も有名であった。名取川の埋もれ木灰を選んだ理由は、伊達家が名取郡方面に勢力を伸ばしたことを強調したい意味合いが籠められているのであろうか。将軍からの返礼も太刀や香など度々であった。成宗の墓は国見町小坂の山の麓にある。

梁川八幡神社と龍宝寺 22 23 25

梁川地区

古くは梁川の八幡宮として信仰があり、伊達氏が入部してからは伊達市の氏神「亀岡八幡」が合祀されて、伊達氏の保護を受け、伊達六十六郷の惣社として威容を誇った。鐘楼・観音堂・三重塔跡・園地などが長い参道の両側に残り、いまも往時の



鬼石観音堂

の面影を残している。八幡宮本殿は延享2年（1745）9月の建立。今も礎石が残る三重塔は平泉藤原秀衡の建立の伝えがある。



梁川八幡神社

八幡宮神主は菅野氏で、伊達氏に従って伊達郡に入部したとされる。菅野氏は梁川天神社の神官も兼務しており、屋敷は梁川の町中にあった。伊達氏入部以前の神主宮大夫は八幡社境内に屋敷があった。宮大夫の上に神官菅野氏が置かれたため、宮大夫に長年のわだかまりがあったと見られる。伊達氏が去った後の慶長7年（1602）宮大夫は亀岡八幡のご神体を密かに持出し仙台へ移った。そして仙台亀岡に亀岡八幡宮を建立してもらい、その神官となっている。

梁川城東の菖蒲沢にあった龍宝寺も八幡宮の別当であったようであるが、詳細は不明である。この龍宝寺は15世紀には米沢に移り成島八幡宮の別当になっていたが、梁川の龍宝寺は引続き残された。仙台の寺の仏像胎内銘に「享徳4年（1455）、梁川菖蒲沢恵沢山龍宝寺」とある。文明10年（1478）龍宝寺は成島八幡宮の社務を務めている。天文2年（1533）10月30日の実海印可状に「伊達郡龍宝寺霊場」とある。天正12年伊達輝宗正月行事に「りゅうほう寺之しゅと」とある。これは米沢の龍宝寺であろうか、梁川の龍宝寺であろうか。また弘治4年（1558）の「八幡宮祭礼規式」に千手院が見える。天正14年政宗黒印状千手院宛に「衆徒中之頭と為す之事」とある。

梁川の八幡宮別当は江戸期には亀岡寺であった。それ以前の室町期の別当は光明院であった



龍宝寺

と伝える。梁川八幡の隣にある龍宝寺（旧亀岡寺）の山門と鐘楼は茅葺でたいへん趣がある。観音堂は信達三十三観音巡礼の第三十三番札所になっている。観音堂は文明3年（1471）伊達成宗が再建したが、文明5年4月大風で倒壊、文明5年11月に材木取り集め、再建したと伝える。現在の観音堂は享保3年（1718）の建立という。これら三建築は市指定文化財。境内は県指定史跡名勝となっている。

古町観音堂 30

梁川地区

信達三十三観音巡礼札所の第三十番札所である。伊達家先祖が建立。古くは利生寺観音・利生殿観音と呼ばれていた。文明4年（1472）2月焰焼、文明17年に再建したと伝える。現在は称名寺が管理している。「蓮門精舎旧事」の成徳寺末寺中に「称名寺奥州伊達郡梁川不遠山利生院 天文3年甲午年起立也開山法蓮社良授上人…」とある。



古町観音堂

伊達植宗^{たねむね} 奥州守護職となる

梁川城跡 27

梁川地区

梁川城は丘陵突端部を利用した平山城で、南は広瀬川の断崖、西は段丘、北は中井戸と呼ばれる大堀、東



本丸庭園

も大きな堀で画されていた。宮城県図書館蔵の梁川絵図等によれば、城の東側には土塁と堀を方形に廻らした城郭寺院が南北に連なっていた。梁川の城絵図は数枚保存されているが、伊達氏時代のものは残されていない。

梁川城は室町時代に伊達氏の府城として使用されており、11代持宗12代成宗は多くの献上品を携えてここから上洛している。14代植宗は大



三の丸の土塁と堀

永2年（1522）12月奥州守護職に就いた。発掘調査の結果、本丸跡から園地跡など当時の素晴らしい遺構が検出されている。戦国期には伊達政宗の叔父伊達宗清入道鉄斎（梁川氏）が居城した。天正10年伊達政宗は亀岡八幡宮参拝のおり梁川城に逗留している。

伊達氏の後、蒲生氏郷が会津若松城主となったが、次の蒲生秀行の代に蒲生喜内が梁川城に1万3千石で

配されている。喜内は氏郷の死後、石田光成に招請され、関が原の合戦で討死している。

慶長3年、上杉景勝が若松城主となり家臣の須田長義が2万石で梁川城に配されている。

北三の丸跡の土塁は特に高く、堀の幅も広い。東南部の金沢堀も幅が広く深さも深い。これらの堀は蒲生喜内か須田長義の時期の造成と見られる。本丸跡にある心字の池そばの物見櫓跡ものみやぐらの石垣は穴太積みで、一緒の時期であろう。物見櫓が載る土塁は池の導水路や園地の一部を埋めているから、大幅な城の修築があったと考えられる。慶長5年に伊達政宗は伊達郡奪取のため梁川城を攻めたが、簡単に敗退してしまった。その原因は、須田氏の戦術や武勇もさることながら、梁川城が政宗時代より堅固な城に変身していたからかも知れない。

北三の丸を大学館と言いつづけているが、由来は不明である。あるいは上杉家臣の横田大学に関連があるかも知れない。横田は慶長5年の伊達・上杉合戦の際、主君を裏切り伊達政宗に通じて捕縛された。彼はまた、豊臣秀吉に愛されたことでも知られ、豪勇な武士でもあったのである。

梁川城はその後天和3年（1683）、尾張徳川藩松平氏が西三の丸に陣屋を構えたのを始めとして井上氏や安藤氏などが陣屋を西三の丸に置いた。文化4年（1807）には福山藩松前氏が9千石で梁川に配されると、再び本丸などが使用された。

現在、本丸跡は梁川小学校敷地として利用されている。南二の丸跡は梁川高校の敷地・東二の丸は梁川中

学校のグラウンドになっている。

一帯は県指定史跡名勝。

こおりにしやま

桑折西山城跡

伊達郡桑折町

丘陵突端部を利用した戦国期の山城である。北と東を産が沢が流れている。本丸・中館・西館・空堀や石塁などが当時のまま残されている。近くにある常陸館なども一体と見られる。一帯は国指定史跡。

14代伊達植宗は天文元年に梁川八幡宮を桑折（南半田地内）に移したという。このことは伊達氏の本城を梁川から桑折西山へ移したことを意味する。手狭な梁川城の改修を諦めて、奥州街道に間近で、長井や北条地方にも便利な桑折西山を選択したと判断される。しかし間もなく天文11年（天文9年ともいう）植宗と晴宗の父子対立が始まり、晴宗は父を西山城の座敷牢に幽閉してしまう。植宗救出のため、植宗の娘婿にあたる相馬顕胤や懸田俊宗などが奮闘した。結果、息子の



桑折西山城跡

晴宗方が勝利し、植宗は丸森城に引退。晴宗は米沢城へ移り桑折西山城は空き城となった。

伊達輝宗は永禄10年（1567）桑折にあった亀岡八幡宮を旧地の梁川に戻すことを決意。八幡宮造営の費用は伊達一家と一族に割り当てられ、梁川八幡は元亀2年（1571）11月再建された。

なお、鎌倉時代に伊達氏が高子岡城や梁川城・桑折城に居城したとする所伝があるが、鎌倉期の桑折城は桑折西山城ではなく、もっと平地に近い場所にあったとも考えられる。9代伊達政宗が関東府と対立し、関東公方軍が政宗のいる長倉館や桑折赤館を攻めているが、この赤館の場所は解っていない。

おおたつめ

大立目館跡 ⑧

保原地区

大立目家譜によれば、永禄2年（1559）10月「奥州伊達一族大立目下野守朝安」が紀州熊野宮に参詣している。その子孫は天文の乱のとき伊達晴宗から下長井あらと新砥郷を拝領している。大立目地区の八幡神社付近が館跡と伝えられる。

かけだ

懸田城跡（掛田城跡） ③⑥

霊山地区

比高差125m、土塁・空堀・帯郭からなる。室町時代に懸田氏が居城した。城跡は「茶臼山」と呼ばれて親しまれている。懸田氏は伊達氏と縁戚で、伊達氏に従属しながらも独立した領主権をもっていたとされる。天文年間初期のころは宮城県南部の名取郡北方や山形県北東部の北条庄などを領した大名に成長していた。このころ伊達晴宗と不和となり、家臣の中島氏に

裏切られ、懸田氏は滅亡した。中島伊勢は伊達家に迎え入れられ金山城主となった。その子は政宗の家臣として活躍している。最後の当主懸田俊宗の夫人は美貌で、中島伊勢の金山城へ連れ去られたという。俊宗の弟晴親は藤田氏の名跡を継いでいたが、親戚の相馬氏を頼って逃れている。市指定史跡。



懸田城跡

首塚⑦

保原地区

天文年間のころに伊達家で内紛（親子喧嘩）があり、奥州を巻き込む大合戦となった。保原地方でも高子原合戦と呼ばれる合戦があり、多くの死者が出た。戦いは最終的には子の晴宗側が勝利したが、親の植宗側についた相馬顕胤が敵味方の別なく死者を埋葬したので、戦国武将相馬顕胤の思いやりが後々まで評判になったという。「奥相茶話記」^{おうそうさわき}によれば首塚は二つあったらしい。



首塚

箱崎愛宕神社の獅子舞③

伊達地区

この獅子舞の歴史は旧く、野獣による農作物の被害を防ぐために天文7年から始まったという。また箱崎愛宕山の金鉱山の工夫たちによって始められたという言葉も残されている。金山は箱崎から保原柱田の山々に広がっており、伊達氏が開発したと伝えられる。獅子舞は4月29日30日愛宕神社の例大祭に奉納され、五穀豊穰や家内安全の祈願をしながら地区内を練り歩く。県指定無形民俗文化財。

極楽院跡①

伊達地区

極楽院は修験寺院で、中世には紀州熊野参詣の先達者であった。文亀3年（1503）の熊野勝達坊の『旦那売券状』によれば、極楽院は信夫郡北郷の信者を率いて参詣している。天文3年（1534）伊達植宗の息子清三郎が極楽院に入嗣して以来、伊達家の庇護を受けた。江戸期には、極楽院は伊達郡西根郷の修験の触頭であった。明治初期に廃寺となったが、



院主歴代の墓碑



極楽院跡

建物は近世末の形態を留め、護摩壇に使用した部屋も残っている。杉板戸には保原の絵師熊坂適山の絵が残る。極楽院歴代の墓碑は金秀寺に移されている。院跡・墓碑は市指定文化財。

保原城跡 ⑩

保原地区

江戸時代後期の下保原村絵図である。保原城跡の本丸は陣屋の右方に広がる方形の部分である。「溜井」・「中村分」となっているのが堀跡である。本丸は現在の中野病院の付近と見られ、本丸北側の大堀は元木溜井と呼ばれ近年まで残っていた。「保原村明細帳」は、保原城は鎌倉初期に伊達氏が創始したとも伝えるが確証はない。戦国期に伊達家臣中島伊勢や懸田御前が在城した節が見られる。伊達政宗家臣となった大内定綱も一時期ここを領した。江戸初期には上杉家臣大石播磨守や小越平左衛門が保原城の鎮将として見える。廃城後は、本丸跡は畑地に、堀跡の大半は水田になった。

柵や塀で囲まれている二の丸部分は保原陣屋となった。保原陣屋は現在の保原中央公民館付近である。白



絵図に見える保原城跡

河藩（松平氏）の信達分領支配のために、寛保2年（1742）に設置された役所で、保原村を中心に17村を支配した。飯坂村や柳田村、掛田村などもその支配に属した。文政6年（1823）からは阿部氏白河藩の分領となる。慶応2年（1866）に阿部氏が棚倉藩に移っても保原陣屋は存続された。

たもと 田元地蔵尊(鉛買い幽霊) ⑩ 保原地区

毎夜掛田の町へ鉛買いに来る不思議な女性がいた。あとをつけていくと女は墓の中へ入って行き赤ん坊に鉛を舐めさせていた。女は柱田の四十九院地区に住む遠藤という武士の妻で、身重のまま亡くなったのだった。この子は成長して立派な武士となり16代伊達輝宗の家臣として活躍した。そして輝宗から四十九院を名乗ることを命じられた。現在その子孫が宮城県丸森町の金山城跡近くに住んでいる。いま遠藤家の墓地跡にはたくさんの地蔵像が祀られ、「田元の地蔵」「鉛買い幽霊」として親しまれている。この「鉛買い幽霊」の話は全国に広まっている。



田元地蔵

奥州戦国の覇者 伊達政宗

伊達政宗の八幡宮参詣 ② 梁川地区

伊達政宗は永禄10年（1567）に生まれた。幼名をぼんでんまる梵天丸と^{めごひめ}いった。天正7年（1579）田村清頭めごひめの娘愛姫と結婚。天正9年伊達政宗は父輝宗とともに伊具郡で相馬氏と戦ったのが最初の戦いであった。天正10年政宗は亀岡八幡宮に参拝、3日間梁川城に逗留している。当時の梁川城主は政宗の大叔父伊達宗清入道鉄斎（梁川氏祖）であった。天正16年5月20日には良覚院栄真を使者として具足や冑や太刀を奉納させている。

天正12年伊達政宗は父輝宗に家督を譲られた。天正13年10月8日宮森城（岩代町）にいた輝宗は二本松城主畠山義継に捕らえられ、阿武隈川近くで、追いかけた伊達家の鉄砲隊に撃たれ、死去した。鷹狩りに出ていた政宗は急遽駆けつけたが間に合わなかったという。

仙林寺の七宮伯耆碑 ⑨ 保原地区

七宮伯耆信盛は戦国時代に伊達政宗の客分として身近に付き添っていた人物。剣術のほか書の達人であった。政宗に書を教えたともいう。訳あって政宗の元を離れ、保原に住した。保原の遠藤盛久家で道場を開き七宮流剣術を



七宮伯耆碑

指南したという。しかし、数年で保原を去り、その後の行方は知れない。七宮流剣術は深淺夢想流ともいい、遠藤家によって明治期まで受継がれ、多数の門人を輩出した。また七宮伯耆の一族は江戸時代保原鉄砲町で修験八明院として長く存続し、明治初期まで続いた。八明院にあった馬頭観音堂は近年保原薬師堂境内に移されたという。

なかけしゅう 名懸衆と野武士 霊山地区ほか

伊達天正日記（「野臥日記」）は伊達政宗が相馬攻めに先立って刈田郡・伊達郡のうちの動員可能な野武士（農民）を調査したもの。天正17年4月に書上げられている。野武士たちは郷名ごとに出動可能な陣夫全員が名前を書き上げられ、通常農業に従事している者たちで肩書きのない者（本百姓）と、「なご（名子）」・「下人」・「浪人」・「はしり夫丸」・「つめ夫丸」の肩書きがある者とに区別されている。郷名のところには領主（伊達家臣）の名前も記されている。名子は本百姓に付属した農民（農奴に近い）と考えられる。下人は奉公人であろう。野武士たちは特に優れた者は「上」と記載され、また年寄は「老」などと記載されている。名懸衆は在郷の特別な待遇の者で、10代氏宗または13代尚宗のときに制度化された身分といわれ、農業に従事しながら合戦時に伊達家のもとに馳せ参じる伊達家直属の家士たちである。戦国時代の一般農民たちの多くの名が記された点で貴重な資料である。私たちの祖先の名もひょっとしたらあったりして…。覗いてみる価値がありそうである。大石郷の部分を見る

と、186名の野武士のうち17名の名懸衆・11名の名子・45名の下人が記載されている。苗字別では菅野や大橋が多い。

伊達政宗、秀吉に屈す

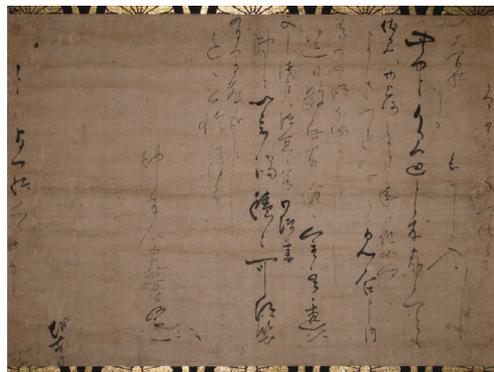
天正17年（1589）6月、伊達政宗は会津の^{あしな}葦名氏を攻略し、10月には須賀川の二階堂氏の内紛に乗じて須賀川を手に入れた。伊達氏の領域は、福島県中通り・会津・山形県南部・宮城県中南部に及ぶ広大な地域となった。天正18年（1590）1月、政宗は会津黒川城で新年を迎え、連歌の席で「七種を一葉によせてつむ根せり」と詠んだという。七種とは安達・田村・安積・岩瀬・石川・白河・会津の七郡をさすという。伊達氏歴代の中で最大の領土となった。

豊臣秀吉は政宗の葦名攻めを非難、説明を求めてきた。政宗は弁明の書状を送ったが、秀吉には通じなかった。秀吉はしきりに小田原参陣を求めた。天正18年5月、政宗は漸く小田原参陣を決意。黒川を出発して、6月5日政宗は白装束姿で小田原に着き、政宗は厳しい詰問を受けた。その結果、政宗は会津・岩瀬・安積の三郡を没収され、長井・伊達・信夫・名取・刈田・伊具などは安堵された。7月小田原の北条氏の征伐が済むと、秀吉は会津黒川へ向かった。8月9日秀吉は会津・岩瀬・安積に加え白河・石川の諸郡を取上げ、92万石すべてを蒲生氏郷に与え、さらに大崎・葛西地方を豊臣秀吉の臣木村吉清清久父子に与えた（奥州仕置き）。まもなく葛西・大崎地方の各地で大崎氏ゆかりの者たちが一揆を起こして木村らを佐沼城に包囲。豊臣秀吉は一揆の鎮圧を蒲生氏郷と

伊達政宗に命じた。

一揆鎮圧後の天正19年8月～9月のころ、政宗の所領は残る信夫郡・伊達郡・長井郡などが更に没収され、新たに葛西大崎地方が政宗に与えられた。新領は現在の相馬市宇多・宮城県・岩手県南部の地域約60万石となり政宗は米沢城から岩出山城へ移り、政宗の旧領は若松城（黒川城）主蒲生氏郷に加増された。

政宗は和歌・茶・能を嗜む一級の文化人でもあった。文禄3年（1594）2月に秀吉主催の吉野の花見に招



17代政宗の自筆書状

かれ、この日に詠んだ自筆の和歌が残されている。写真の政宗書状は、同年5月29日与一（細川忠興）へ送ったもので「浅左（浅野幸長）」「金雲（金森出雲）」の名も見える。いずれも名高い文人大名である。

慶長3年、蒲生氏郷は転封され、越後から上杉景勝が会津若松に入城した。

慶長5年（1600）7月、政宗は関が原の合戦の最中、刈田郡の白石城を攻め取った後、10月伊達氏の故郷伊達郡と信夫郡を奪回すべく軍を進めてきた。大枝城な

どに陣を置き、梁川城などを攻めた。しかし梁川城代須田長義・福島城代本莊繁長らの抵抗が強く、夢は実現しなかった。このとき政宗は、徳川家康と上杉景勝を関が原の合戦へ参加させないよう牽制する約束をしており、成功したら伊達郡を含む旧領約50万石を安堵する旨の書状をもらっていた（合わせると政宗の領地は100万石を越えるので、この状は百万石のお墨付きといわれている）。しかし加増をされたのは自分が攻め取った刈田郡だけで、約束は反故に終わった。

慶長5年12月政宗は仙台城築城を開始。同8年には入城し、同年には町の移転もほぼ完了していたという。

たいじょう 大条館と山戸田八兵衛 38 霊山地区

天正18年（1590）11月、葛西大崎一揆のとき山戸田八兵衛と牛越宗兵衛は伊達政宗謀反の証文を蒲生氏郷のもとへ持参。のちに二人は蒲生氏郷に召抱えられた。しかし後の豊臣秀吉の御前での詮議で、この証文は政宗の花押かおう せきれいの鶴鴿に眼があいていなかったため偽物と断じられ、政宗の罪は問われなかった。この申し開きに失敗していれば、政宗の首はなかったろうと言われる。政宗の用心深さを物語る一件である。山戸田八兵衛と牛越宗兵衛は政宗の右筆ゆうひつであったというから、なお更である。しかし、天正19年秋、政宗は伊達信夫など先祖伝来の故地を含む七郡を召し上げられ、代わりに葛西・大崎地方を拝領して岩出山城へ移され、伊達信夫など七郡は会津の蒲生氏郷に加増された。山戸田八兵衛は文禄3年（1594）の蒲生領高目録では山戸田村と大石村など2千石を領しているから、かなりの厚遇で

ある。山戸田八兵衛が居館していた城は不明であるが、山戸田の大条館や本館とも考えられる。

山戸田の熊野山にある熊野神社は、大条館主山戸田八兵衛信教の子信吉が建立したという。

つきみだて ほうき 月見館と須田伯耆 42 月館地区

広瀬川と布川に挟まれた天然の要害であり、本丸跡・二の丸跡・三の丸跡・空堀跡がある。南側の真徳寺付近が大手門跡と見られる。戦国期に須田伯耆が居城したと伝えるが、それ以前の城主は不明である。須田はもと須賀川二階堂氏の家臣須田美濃守の一門で、のち伊達輝宗家臣となり、大波大膳（大沼大膳ともいう）の家中に属したという。須田は天正12年（1584）10月、伊達輝宗に殉死している。

天正19年秋、須田伯耆の息子（伯耆を襲名）は旧伊達政宗領内で蒲生氏郷攻撃が計画されていることを蒲生方に密告した。父の殉死のことで伊達政宗の処遇に不満があったという。蒲生氏郷は首謀者たちを斬首や張付けにした。須田伯耆はその後蒲生家臣となり、文禄3年（1594）蒲生領高目録に、糠田などを領しているのが見え、その後も月見館に居館したと見られる。また須田伯耆は上杉方として最上攻めに参加しており、慶長3年に蒲生氏の後に入部した上杉景勝の家臣になったと見られる。



月見館跡

高子沼の金精錬所跡 ⑥ 保原地区

昭和の初期、高子沼の底から中世のものと思われる鉍石粉碎用石臼や廢鉍石が多数出土しており、かつて金鉍石の精錬所跡があったのは事実である。近在には当時の工夫の子孫と見られる人々もいる。天正19年(1591)伊達政宗が豊臣秀吉に伊達郡を召し上げられたとき、政宗は土手を築いて沼とし金の精錬所跡を隠したという伝説がある。沼の周辺の山々には金鉍山の坑口が残っている。江戸中期に高子の熊坂氏が創始した名勝「高子二十境」の地でもある。

とみざわ だい 富沢城跡、台館跡 ⑰ 保原地区

富沢地区の入り口、二つの谷が合わさる丘陵突端部にある小さな城である。17代伊達政宗家臣富沢日向守の居城と伝えている。富沢氏は小川を挟んだ対岸の岡に観音堂(信達26番札所)を再建している。

また、500m南方に台館跡があり古関内蔵之進が居城したと伝えられる。



右の山が富沢城跡、左が台館跡

ねごや 根子屋館跡 ⑮ 保原地区

尾根の突端部を利用した山城とその北東の山麓の根子屋からなる典型的な中世城郭である。西側は河川で画され、急崖である。山上の東南部に空堀がある。本丸とその周囲を囲む曲輪との段差が高く、豪壮である。北側の緩い傾斜地の地域は常の住まいであろう。「根子屋」や「木戸」の字名が残っている。館主は伊達家臣野田大学と伝えられ、この地区にはその子孫と見られる野田姓が多い。



根子屋館跡

たかなりた 高成田城跡 ⑱ 保原地区

細長く伸びた山城で、本丸・二の丸の周囲を帯曲輪が囲んでいる。西麓の字「館ノ下」は根小屋と見られ、その西を河川が北流し外堀の役目をしている。平和時は根小屋に居住し、合戦時にだけ城に籠もったと見られる。「高成田家譜」によれば、高成田氏は高成田左馬丞長頼が祖で、伊達郡高成田に居館したとしている。その子孫は伊達輝宗・政宗家臣として活躍している。



高成田城跡

小国城跡 41

霊山地区

戦国期に大波氏の一族大波蔵人が居城したとされる。根子屋・空堀を伴う曲輪・詰めの城からなる。



小国城跡

さかした 坂下館跡 43

月館地区

岳林寺の北山が建跡で、本丸・二の丸と伝える場所もあるという。鎌倉將軍頼家に仕えていた佐藤信季が居城したと伝えられ、その子孫佐藤弥右衛門はおて小手六十三騎の一人で、二百石を給されたという。小手六十三騎とは、慶長5年の上杉氏と伊達氏の合戦で、梁川城等に妻子などを人質に差し出して上杉方として戦った小手地方の武士たちのことである。(裏切って旧主である伊達氏に奉公すれば家族が殺されてしまい、手抜きをすれば自分の命が危うくなる)

おおいのすけ 興国寺の須田大炊介長義墓 24

梁川地区

上杉景勝家臣梁川城代須田長義とその夫人及び長義の父満親の墓が興国寺にある。

慶長5年10月、伊達政宗は先祖伝来の故地伊達郡・信夫郡を奪還しようと梁川城や福島城を攻めた。しかし、上杉家臣の猛将須田長義や本庄繁長らの戦力の前

に屈した。伊達郡には政宗の負け戦の話が面白可笑しく伝わっている。政宗は家紋入りの陣幕を奪われ、命からがらすりかみがわ摺上川沿いに逃げたという。後年、政宗が上杉景勝と須田長義に会ったとき、政宗は懐かしがって須田に太刀を与えたという。粟野の須田一族は須田長義の子孫と伝えられる。長義の炭塚と呼ばれるものが梁川城東の興国寺の旧地近くにある。

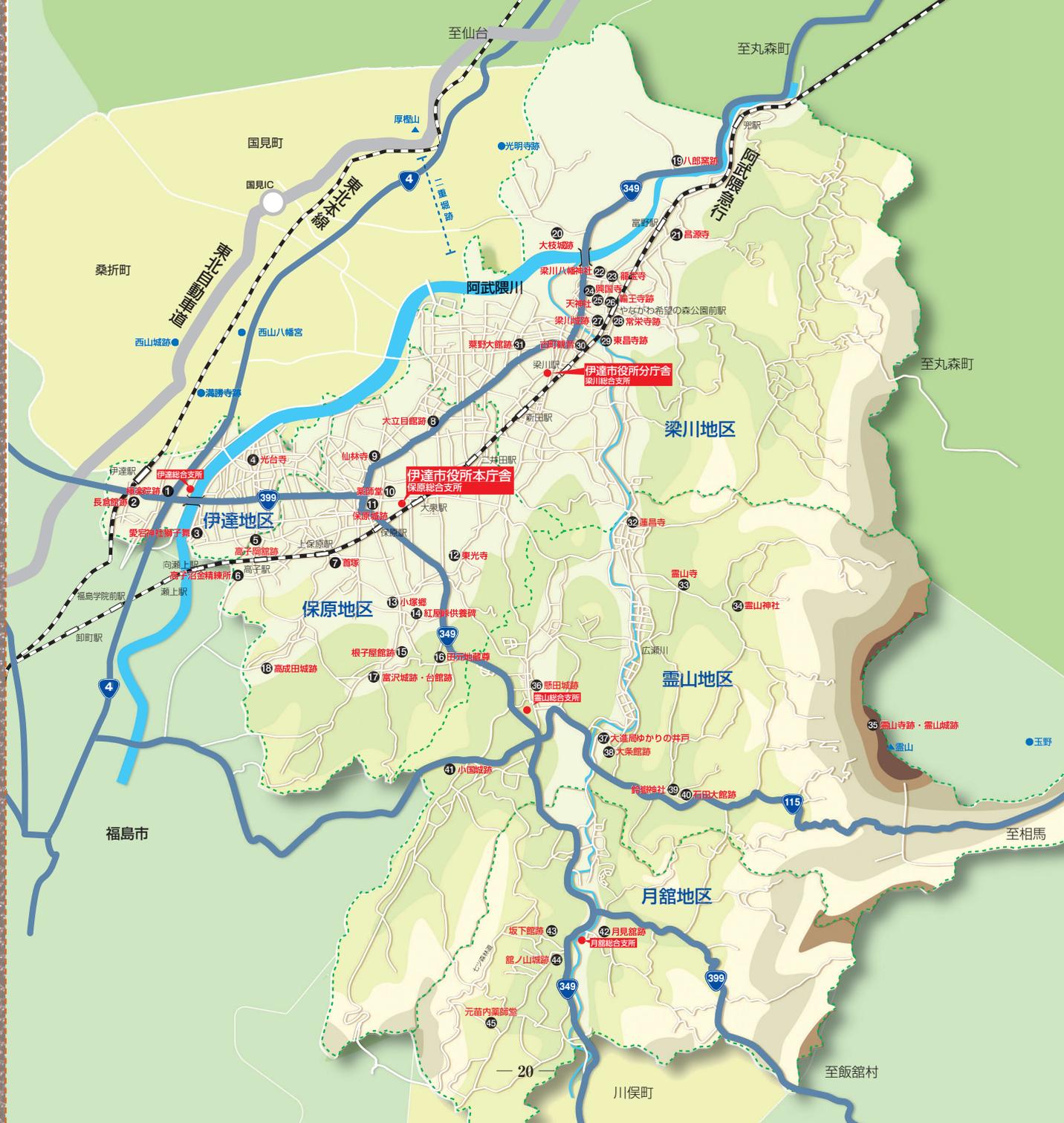


須田氏の墓所 浄慶廟

玉野

相馬市

玉野地区は宇多郡・伊達郡・伊具郡の境界に位置している。相馬地区から伊達郡や福島へ塩荷を駄送する街道の中継基地で重要な場所であった。慶長3年(1598)蒲生氏に替わって上杉氏が入部すると、上杉氏は早速玉野開発と称して家臣の横田大学や堀江与五右衛門らを派遣した。堀江与五右衛門はもと伊達家臣で、伊達政宗の「天正日記」に伊達名懸衆として名前が見えている。地元の石田氏らが横田に協力して進められた。この地域は古くから境界紛争が絶えなかった所で、江戸時代も長く紛争が続いた。



※ 読み方が難しい地名や人名にはルビを付けたが、
中には他の読み方があるものもある。

初版 2006. 9
二刷 2007. 1
三刷 2009. 6

お問合せ

〒960-0792 福島県伊達市梁川町青葉町1
教育委員会教育総務課 TEL 024-577-3245
産業部商工観光課 TEL 024-577-3175



発 行 福島県伊達市商工観光課

編 集 伊達市教育委員会教育総務課